

## 卒業設計のタイトルと概要

### 谷中の途（ミチ）ひとつながりの邸（イエ） - 独居老人のためのシェアハウス -

現在、空き家や独居老人である住まいとそれにつながる私道をひとまとまりの敷地とし、商店街を内包するようなひとつながりの邸・グループホームの設計。街区の住人の抜けミチったり、小さな庭だったり。商店街や歴史・ミチをもとに自然環境と暮らしを考える。

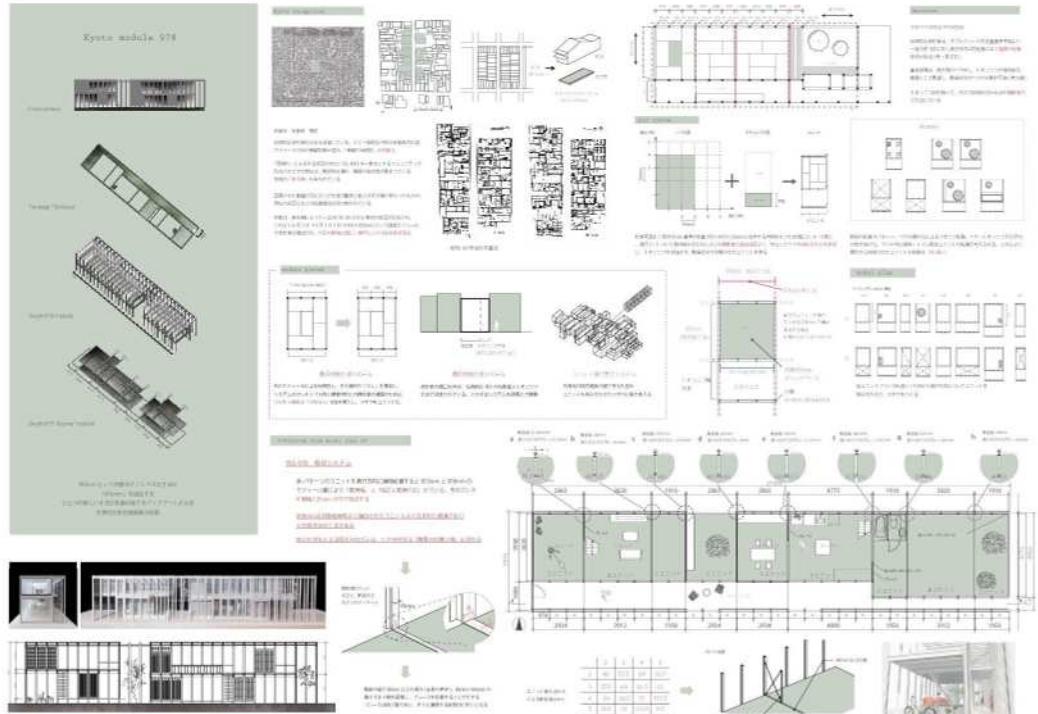
共同体として高齢者を住まわす事が この街にとっても、商店街と関わりをもちシェアすることで、作り出された町並みを残す事にもなると考え、地域のコンテクストを読み、生活の中心である商店街から、街全体への賛わいへと都市へのつながりを意識した。谷中の町並みを生かした新たな風景・住まいのあり方の提案。

## 研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

### 研究旅行テーマ：町並みの固有性・自然と生活空間

### 訪問予定先：ベトナム/ハノイ・ホイアン・フエ「新旧市街地」 タイ/バンコク 「水上マーケット」

その地の歴史的価値や固有性を継承し、日本と比較し温暖化するこれからの自然環境に配慮した建築空間を研究します。



#### (1) 研究旅行テーマ

「スペイン・バルセロナのグリッド都市における街路側とパティオ側からみる都市景観の二面性とその共存の可能性」

バルセロナは、歴史的な街並みが規則的なグリッド街区を囲うように展開され、美しく統一感のある要領を形成している。整然としたこの街区の美しい街並みは、空間的に美しい面を顕彰し、色彩鮮明。更には先進性を主張することを意図している。しかし、この規則的な街区の形成は、より細かい部屋再生によるものであり、内部に中庭（パティオ）を有すること有名である。そしてそのパティオに周辺の建物のファサードに対して、非常に素朴な普段見慣れた建物の姿が並んで、それは全く別の景観が生まれている。

バルセロナの街並みの二面性は、その特徴的で個性的な景観をもたらす要因であり、政策の影響により、独立して形成された結果があるのではないかと思われる。

このひとつの都市における「街路側」と「パティオ側」などと、その特徴や特徴、パターン化などを観察することにより、新たな都市景観のあり方、可能性を見出したい。

#### (2) バルセロナの旧市街地の都市・街並み・建築物について

バルセロナ旧市街地は、19世紀から急速な人口増加に対する対策という目的のもと、都市の拡張計画（イル・デ・ラ・セラ・モラ）として、整備され、およそ 313m四方の半規形の街区ブロックの連続によって構成されている。

しかし、1960 年代以降ではパティオは機能せず、建物の老朽化や公共施設の荒廃ならびに不足、移住者の離散や空室化などの弊害が生じた。そこで現行の街並みの整備や路面のコンバージョンによる現代化シナリオなどとともに、老朽化した街区を取り壊して新たに公共空間を創出する「市街地の多孔質化」がパティオ再生とともに実験的に進められてきた。

#### 世界有数の絆地の裏側に設けられている、地域の広場

再開発によりパティオを有する街区を中心し、半径 200m 以内に位置する 8 つの街区の住民が、新たに整備された公共空間としてパティオを享受できるようにするという計画

街路に面する壁面のファサードの面積に対し、その裏側は、パティオを中心として複数棟が集まる素朴な広場空間が形成されており、その周辺の建築物は、生活をパティオの向て開き、生活の面積のあふれだしが連結する景観となっている。

パティオに面する建物の外壁も実験されることで、この裏側の都市景観は、同時に全く異なる表情を有することになる。

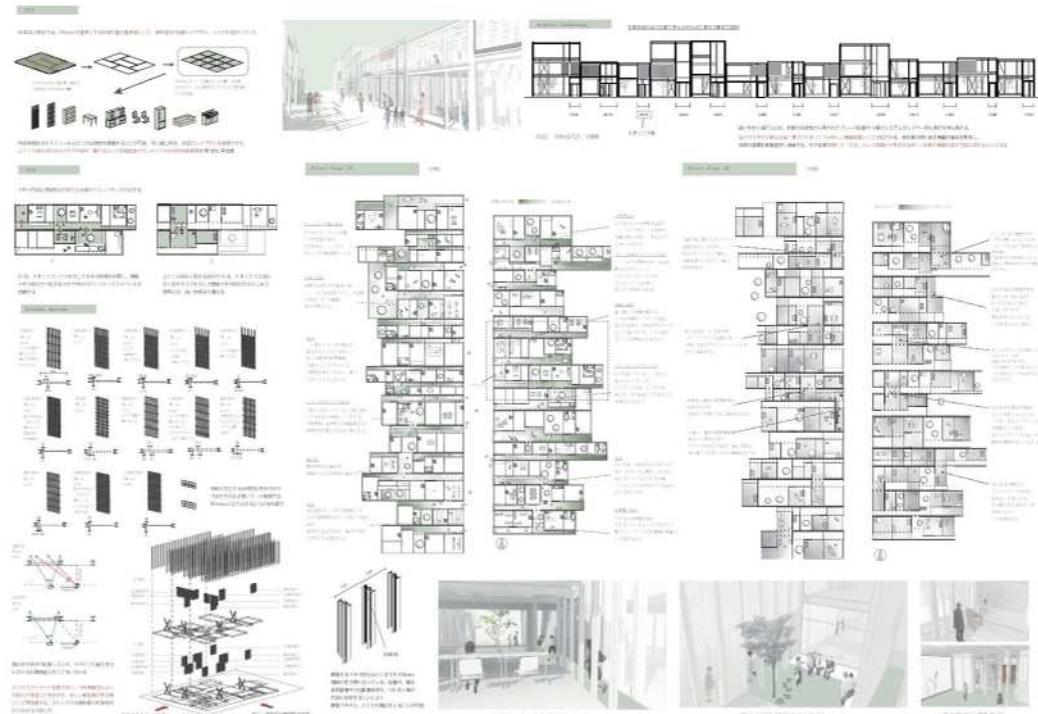
「景観要素・美しさを維持する裏」と「日常生活のあれがしによる裏の生活景」による都市景観の二面性がバルセロナ景観の重要な要素であるといえる。



バルセロナの内側の街並み  
イル・デ・ラ・セラ・モラによるバルセロナ景観



バルセロナのパティオの裏側  
カサ・エ・マ・ゼラノのパティオ  
カサ・エ・マ・ゼラノのパティオ



#### 卒業設計のタイトルと概要

##### タイトル 「Kyoto module 978」

京都市は近年、京都市景観計画による表面的なファサード規制により、現代性と歴史性がいびつに混在した街並みが形成されている。京都市は、条坊制による街区割りが存在し、かつての大量供給住宅である京町家はそこから生まれた京間の置（1910×955mm）というアノニマスな「955mm」寸法体系をベースに発展し、「京都」という景観を形成してきた。

そこに、「978mm」という新しい寸法をひとつ挿入する。これは次の世代の京都の寸法体系となる。

「978mm」は対象街区固有の値で可変値である。京町家が衰退し、迷走する京都の景観に対し、「モジュール」という視点から京町家を再定義し、次世代の京町家の大量供給を可能にし、街並みを形成する設計プロセスの提案

歴史的景観と、そこでの生活は、ただ守るものではない。京町家は今も進化していく、次世代へのアップデートは可能である。955mmに追加する街区固有の寸法体系を生むことが、その解となりうるといえる。

#### 研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

研究旅行のテーマ：「スペイン・バルセロナのグリッド都市における街路側とパティオ側からみる都市景観の二面性とその共存の可能性」

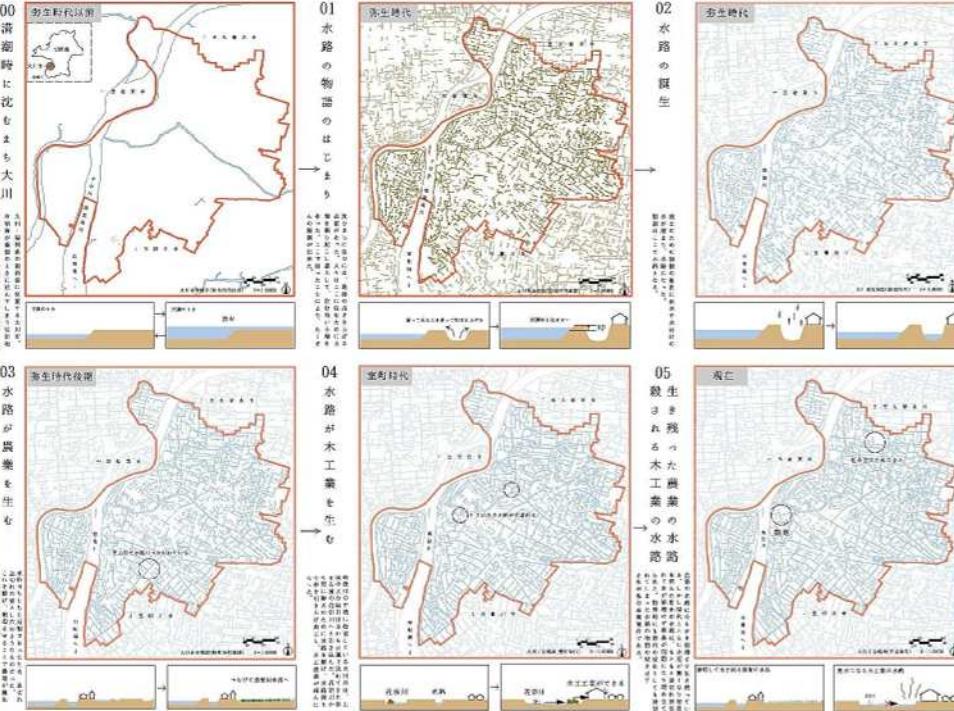
訪問予定の国：スペイン・バルセロナ

バルセロナは、歴史的な街並みが規則的なグリッド街区を囲うように展開され、美しく統一感のある景観を形成している。そしてこの街区は内部に中庭（パティオ）をもつ。このパティオ内部は街区の閉じた生活空間であり、通りの個性なファサードに対し、非常に素朴な雰囲気を有する。このように、街区の裏表で景観に大きな違いが生まれた背景には、様々な要因があり、このバルセロナの都市におけるパティオの生活景としての風景を調査、分析、分類などをを行うことにより、都市景観の二面性の共存のあり方を見出したい。

グリッドの寸法がほぼ同じであるかつての京都のグリッド街区において、京町家の裏側における二つの空間の集合と共通する面もあり、今後の京都の都市のあり方を再考する上でも参考になると考えられる。







## 01 研究旅行テーマ「人々の生活の中の水路利用」

卒業制作を通して得たこれから考えなければならない2つの課題

## 1 生活の中の水路利用

当研究は構成研究で、人々の生活の中に残す水路利用があれやこれで研究してから、毎日皆が水路利用の考え方の切り替わりを実感できるよう開拓していく。私は河川作付、農業施設をそのまま利用する方法で、スリーハウスバーを利用してしまった。改修後の水路も人々の生活の中の水路として残りましたが、新しい水路の開拓もまた実現しました。新たな水路と並んで、これまでの水路と並んで新しい風景が出来るのではないかと考えています。

## 2つの課題を解くための研究方法

水路利用を分類してみると、庶民の水路はいずれも「人々の生活」における水路としていたことが伝統的日本文化になりました。私が残した水路利用のあり方は、古の通りです。

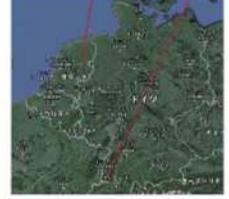
私の研究に今ある生活は多くの人々の生活中で使用される水路についてです。学部時代に残したテーマは、学生時代に出来た水路を残す水路。古き水路を下りて新しい水路から水路の位置を読み取っていました。現在の水路を古き水路と見比べ、比較して新しい水路が出来たことを確認しました。大川市ではすでに、貿易や食料供給などの水路利用が活性化してきました。今更ながら水路はやはりそこに入るもののかどうかではなく、ある特定の人々による水路利用のあり方その風景などといったことがわかったしました。

さらに、農業用水の需要で残っていたのがあれども庄内を残す古い庄内の風景を川下りのうらやまではない。日常生活としての水路についての考察から少しを残すために、農業の水路の研究が必ずあります。

## 02 訪問都市と街並み

人々の生活の中の水路利用の考察を行なう。基盤は、

オランダの「ヒートホルン」、ドイツの「フライブルク」  
HDH自転車ラブリックの「フライブルク」



街並での研究手法  
私は、水路利用の人々のふみを実際に見て、ステッキで探査で都市を行なう。  
水路利用の風景の写真を撮るため、正面鏡を歩いての調査を予定している。



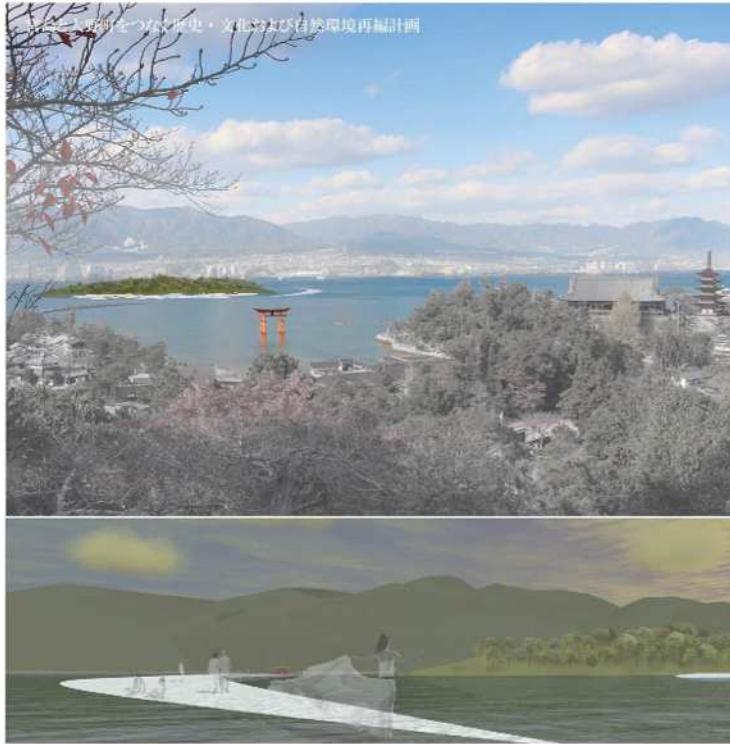
## 卒業設計のタイトルと概要

## タイトル：水路の物語を紡ぐ

福岡県大川市に水路が軸となつた産業構造を示した広場：フィールドミュージアムパークを計画した。大川市は弥生時代に水路が発達し、水路から『木工業』と『農業』の2つの産業が生まれた。水路は時代とともに埋め立てられ、現在物理的にも時代の流れとしても途切れている。再び水路が軸になつた次世代の大川市の産業構造と風景を示した広場：フィールドミュージアムパークを提案する。敷地は大川市の花宗川河口。ここには5つの既存の木工工場と、埋め立てられて途切れた水路が残っている。設計した広場は、3本の水路の継ぎでできている。水路によって2つの産業が結びつく次世代の大川市の風景を提案する。

## 研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

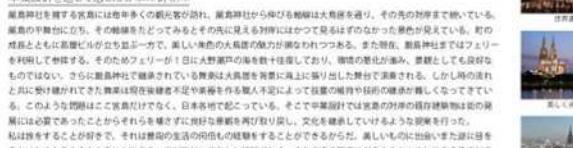
旅行テーマ：人々の生活の中の水路利用 行き先：オランダのヒートホルン/ドイツのフライブルク  
卒業研究・制作で行なった水路調査の結果、水路利用は大きく3つに分類されると考えた。そのうちの2つである「地場産業に使用される水路」や、「観光資源としての水路」は学部時代に国内外の都市での研究を進めていたが、修士では3つ目の「人々の生活の中の水路利用」の研究が必要であると強く思う。生活に根ざした水路利用と交通としての水路について、2つの都市での人々とのふるまいと風景の考察を行なう。



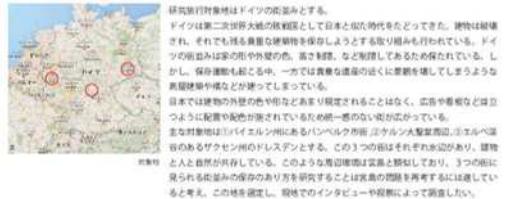
ドイツの世界遺産にみる保存意識のあり方から宮島を生きた世界遺産へ



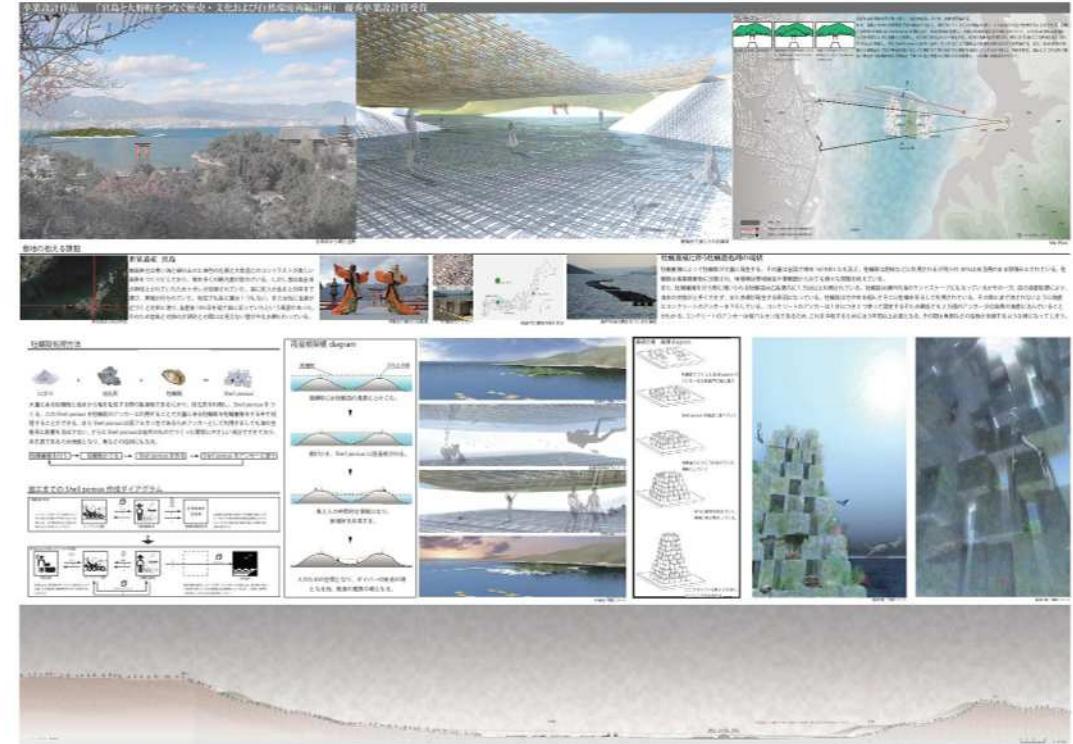
美しい伊良湖から見える海上に浮かぶ神社



研究旅行を通じて感じた日本の別荘地  
研究旅行を通じて感じた日本の別荘地



ヨーロッパの街並みの保存計画（世界遺産）  
ヨーロッパの街並みの保存計画（世界遺産）



## 卒業設計のタイトルと概要

テーマ「宮島と大野町をつなぐ歴史・文化および自然環境再編計画」

牡蠣殻を使って宮島と大野町の歴史、文化、自然環境から風景を再編する。

朱色の社殿と大鳥居が海に浮かぶ様子を見に毎年多くの観光客が厳島神社に訪れる。だが、厳島神社から伸びる軸線をたどってみると、対岸には町の発展と共に高層ビルが立ち並び、朱色の大鳥居の魅力が損なわれつつある。そこで、その軸線上に牡蠣殻でつくったShell 屏風を配置し、一時的な目隠しとして機能する。対岸の低層化が実行された後この屏風の木々は山に返し、Shell Porousは漁礁となる。

Shell porousの舞台は潮が満ちると姿を消し、牡蠣殻の黒色に溶け込む。また、潮がひくとShell porousは姿を見せ始め、そこは黒色と朱色の舞う舞台となり、この宮島の舞いは継承されていく。

牡蠣殻は一度役目を果たした小さな抜け殻であるが、それが再び大きな集合体になり、宮島と大野町のつなぎ目としての大きな役割を果たしていく。

## 研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ「宮島と大野町をつなぐ歴史・文化および自然環境再編計画」

①バイエルン州にあるバンベルク市街

②ケルン大聖堂周辺

③エルベ渓谷のあるザクセン州のドレスデン

この3つの街はそれぞれ水辺があり、建物と人と自然が共存している。このような周辺環境は宮島と類似しており、3つの街に見られる街並みの保存のあり方を研究することは宮島の問題を考慮する上に適していると考え、この地を選定した。

## 時層の護壁 —伊豆大島における土砂災害のアーカイブ—



### 旅行計画書

#### □研究旅行のテーマ「自然と共生する都市のサーヴェイ」

日本の都構成は海外と比べて、なかなか自然に対して柔軟な考え方をしているように思う。

日本は、自然がよく通り、自然大国であるなど、他の国と比べて柔軟性は極めて高い。極めて高いからこそ、自然災害に対して過剰であり、それらが都市と自然との関係を壊してしまっている原因である。自然環境と都市の関係。それこそが今回のサーヴェイに対する意図した主旨の核心である。

卒業設計では、一見、都市的な要素ではないよう見えるが、伊豆大島における自然災害と街の関係性、スケール、景観軸、それらは伊豆大島という自然の中にある街を構成する中で非常に重要な関係である。そして、建築というスケールの小さいものが街を構成する中で、土木というスケールの違うものが必要な不可欠なものに相対した時、土木は街に対してどのようにあるべきかを考えた時に対しての検討である。

今回のサーヴェイでは、自然が融合した村並みの街並みについて研究していく。都市を構成するに重要な要素である、地形、自然、文化、歴史、景観などを中心にヶ月間、研究する。

イスの都市構成では湖、川を中心に暮らしながら歩いていて、雨から日差しや山風を感じることができる。この自然の要素、地形の要素は日本と近いものを感じている。一方で、イスでは日本よりも自然と都市の調和がとれていて、決して都市は自然に対して拒絶していない。

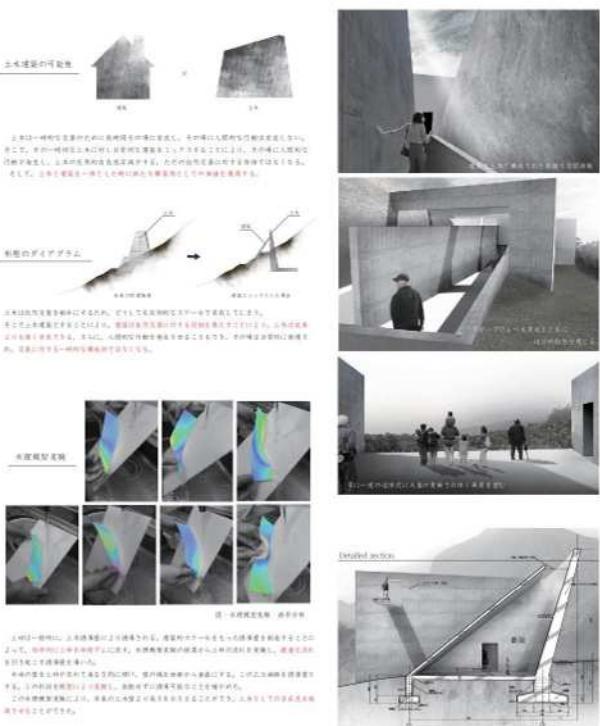
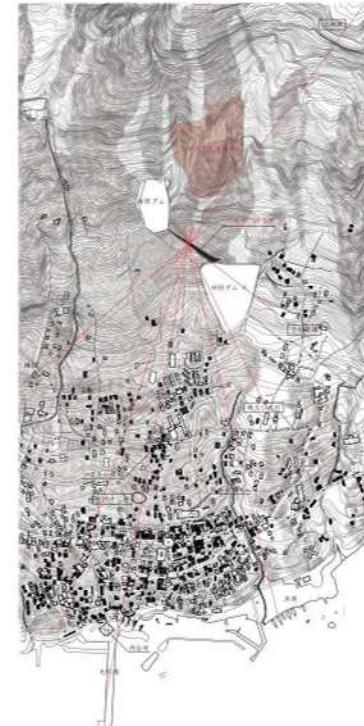
これらの日本は日本高齢化が進み、2020年には東京オリンピックを迎える。時代の変わり目がくるのではないかと私は感じている。そうなった時に、進化する日本のハイテクノロジーが都市や文化をハイテク化し、ハイテクの化け物が元ある自然や地形を殺す都市像になっていくことを恐怖に感じる。そうならないためにも、進化するハイテク技術が間違った都市を産まないように、都市的なダイナミズムと自然のおおらかな調和がとれた都市を目指したい。それに繋がる研究にしたい。

□訪問予定の都市、街並み・建築物

ペルン旧市街(スイス)



イスの首都ペルンは、国内で4番目に人口の多い都市である。ちょうどイス中央部の各州に位置している。アーレ川はペルンの三ヶを流している。アーレ川がペルンを構成する大きな要因である。市民の生活の一端である。町の西側には広がる丘陵地帯は、アーレ川の水河によって作られたものである。ペルンの市街は必ずしも自然のコントラストにそって連なり、美しい街並が形成されている。世界遺産にも登録されている。



### 卒業設計のタイトルと概要

#### 時層の護壁-伊豆大島における土砂災害のアーカイブ-

2013年、伊豆大島で大規模な土砂災害が発生した。多くの人の命と、多くの家が土砂によって流された。この土砂災害により消えた町もある。この出来事は伊豆大島の人々の記憶に永遠と刻まれるであろう。その記憶を建築的にアーカイブ化し、次に起こりうるかもしれない土砂災害に対して町を守る土木建築を提案する。この構築物は土砂を既存の砂防ダムに誘導する機能を持っている。自然災害に対して必要不可欠な土木構築物をどう町という小さな単位のものに、建築という小さな単位のものをミックスする。建築が介入することで与えられる土木構築物の新たなあり方と、土木が介入することで与えられる建築の新たなあり方を提案する。一見、都市的な提案ではないよう見えるが、今回提案する上で設計の要素となる、伊豆大島における自然災害と町の関係性、スケール、景観軸、それらは伊豆大島という自然の中にある町を構成する中で非常に密接に関係する要素である。

### 研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

#### 「自然と共生する都市のサーヴェイ」 スイス、ペルン旧市街

今回のサーヴェイでは、自然が融合した都市構成について研究したい。これからの日本は少子高齢化が進み、2020年には東京オリンピックを迎える。時代の変わり目がくるのではないかと私は感じている。そうなった時に、進化する日本のハイテクノロジーが都市や文化をハイテク化し、ハイテクの化け物が元ある自然や地形を殺す都市像になっていくことを恐怖に感じる。そうならないためにも、進化するハイテク技術が間違った都市を産まないように、都市的なダイナミズムと自然のおおらかな調和がとれた都市を目指したい。それに繋がる研究にしたい。